



学校との縁などをよしなにしてくれるご利益を授けてくれます」

愛染明王の腕から伸びる紐にきつく結ばれた無数の5円玉は人々の祈り。ふらりと訪れ、「こんなところにこんなに凄い仏様がいらっしやっ」と驚かれる人も多いと言います。

安らぎと癒しを与えてくれる「花の寺」としての存在価値

戦前の日本において、寺は地域のコミュニティの中心。子どもたちが自然に集まって遊ぶ場所であるなど、人々の生活と親密で気軽な距離感が保たれていました。放光寺も例外なく、子どもたちが集まったり、「悪いことをすると仏様が怒ってでてくるからね」と親が子どもに冗談を言ったり。現在は子どもが少なくなってきたこともあり、そういう姿は随分減ったといえます。

「みんながもつと気軽に立ち寄れるようにという願いをこめて、放光寺を一年通して花を愛でることが出来る寺に変化させたのは、先代。それまでは梅の寺と呼ばれていました。今は季節によって様々な花が楽しめます」

梅、桜、椿、あじさい、はす、金木犀…。四季折々の花を愛でることが出来る放光寺



「正月は本堂の前に立ち、訪れる人皆にお祈りをしています。3日間立って大きな声で祈りを捧げ続けるというのはなかなかパワーが必要ですが、自分も修行だと思つてやっています。地域の人に『これがないと正月じゃないね』と言われるようになったので、もう簡単に辞められませんか。月に一度、県内の霊場を巡る『巡礼』のようなことも行っていますが、これらは寺としても大事な行事であり、自身のライフワークでもありますね。寺にお詣りして心を綺麗にし、仏様から力をもらう。そしてその力を周囲の人に分け与える。その人自身が希望になることで、周囲を明るくすることができます」

2018年も、元気に前向きに、あらゆる巡り会いの縁を大切に育みながら進んでいけるように…。新春は放光寺を訪れ、気持ちを整えてみては？

周囲を幸せにする力が寺が教えてくれること

例えば大晦日の「除夜の鐘」の際にサポートの為に来てくれる人がいたり、自身の得意なことを生かして寺の行事に参加してくれたら、「地域の人々があつてのお寺であり、お寺の活動です」と住職は言います。

藤木道祖神祭り
in放光寺駐車場
1月14日(日) 19:00~
毎年1/14に行われる道祖神のお祭りです。
山梨県甲州市塩山藤木2438




巻頭集

祈りを結ぶ寺、放光寺。

甲州市塩山の放光寺は、平安末期に創建された歴史の深いお寺。そこには、時代の節目の焼き討ちを逃れ、800年以上に渡って人々の祈りを一身に受け続けた3体の仏像があります。寺社が暮らしと疎遠になりつつある現代でなお、「えんむすびの寺」として、「花の寺」として、人々に求められ続ける背景には、いつの時代も変わらない「ここを、地域の発信元の1つに」という思いが隠されていました。

宗派は真言宗智山派。1184年、源平の戦いの折に源義経の副大将として活躍した安田義定が自身の菩提寺として創立したとされる放光寺。武田氏の時代には、武田家の祈願所に。その後、武田氏が滅亡すると織田信長によって火をかけられて建物はすべて焼けて失われてしまいました。この時、他の場所に持ちだされた仏像は戦火を間逃れたと言いますが、本堂などはその後再建された姿です。

放光寺をひらいた安田義定という人は、京都の朝廷の守護職を終えて山梨にもどってくる際、「京都や奥州平泉の平安文化をこの地域の人も触れてもらいたい」という思いで今も大切に祀られる「大日如来」、「愛染明王」、「不動明王」をはじめ、多くの仏像をこの地に連れて帰ってきました。それは、当時「最先端」とされていた文化であり、それを源にこの地を発信していきける仕組みをつくりたいという願いも込められていたと言います。

「3体の仏像はすべて国の重要文化財です。中でも珍しいのが、天弓の愛染明王様。三眼六腕の愛染明王の

うち、天弓(天をいる弓)を持っているのは非常に稀。日本に3体しかない仏像です」と、住職の清雲俊雄さんは話します。

万物と結ぶ「えんむすび」在るべきところへ結ぶえにし

愛染明王はもともと、真言宗の奥儀である「煩悩即菩提」を示す仏様。縁結び、恋愛成就にご利益のあるということから放光寺は「えんむすびの寺」として幅広い世代に受け入れられています。しかし、それだけではない、と住職は言います。

「縁とは、男女の仲のみならず、万物との縁。私たちは一瞬一瞬、あらゆるものと関係しあつて生きています。そのありとあらゆる縁をプラスの方向に向かう力を授けてくれるのが天弓の愛染明王さん。彼は、莫大なエネルギーを持つ「尾を、手にしている弓と矢で射て、そのエネルギーを世に分散してくれる存在です。つまり、生きる力をたくさん授けてくれる仏様。社会との縁、人々との縁、仕事や

